

# Bouquet des Tons

～ 音の花束 ～

2012年9月11日(火) 20:00 開演



フルート：榎田雅祥

ピアノ：蒲生祥子

E.ノブロ：アンダンティーノと終曲

P.カミュ：シャンソンとバディネリ

A.エネバンス：夢想 - カブリース

G.バレール：夜想曲

チャイコフスキー=タファネル：無言歌

C.サン-サーンス：ロマンス

C.サン-サーンス：バレエ「アスカニオ」のアリア

G.ユー：ファンタジー

J.ドゥメルスマン：演奏会用独奏曲第6番

フランスの音楽家は、バロック期から、古典、ロマン派にいたるまで、音楽において人間の宿命的なことを表現しようとするよりは、旋律の優美さ、響きの気高さというべきものを第一のこととしてきました。音楽においては、人生ではなく音楽そのものが問題であるという思想。それはたぶん私達が、センス、と呼んでいるものに近いでしょう。どれほどに重大で深刻なものでも、センスが無ければ価値が無い、といういわば都会的な感覚の先端を、フランスの音楽家は常に担って来たのです。深刻なそぶりを見せなくては芸術家ではないといったロマン派の時代にも、気高さや優美さを重んじた19世紀後半から20世紀にかけてのフランスの音楽家の作品を取り上げます。